

赦罪の晩課

2016 ver.

赦罪の晩課

2015 ver.

司祭 我等の神は崇め讃めらる、今も何時も世々に

誦経 アミン

誦経 來れ、我等の王・神に叩拜せん。

來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

誦経 第103聖詠

我が^{たましい}靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、爾は光榮と威嚴とを被れり。爾は光を袍の如くに衣、天を幔の如くに張る、水の上に爾の宮を建て、雲を爾の車と爲し、風の翼にて行く。爾は風を以て爾の使者と爲し、焰を以て爾の役者と爲す。爾は地を固き基に建てたり、此れ世世に動かざらん。爾は淵を以て衣服の如くに之を覆へり、山の巔に水立つ。爾の恐嚇に依りて此れは奔り、爾の雷の聲に由りて速に去る、山に升起、澗に降り、爾の此れが爲に定めし處に至る。爾界を立てて之を躐えざらしむ、反りて地を覆はざらん。爾は泉を澗に遣せり、山の間には水は流れ、野の諸の獸に飲ましむ、野の驢は其渴を止む。空の鳥は其傍に棲み、枝の間より聲を出す。爾は上なる宮より山を潤し、地は爾の造工の果にてあき足れり。爾は草を獸の爲に生ぜしめ、野菜を人の需の爲に生ぜしめて、地より食物を出さしむ。酒は人の心を樂ませ、膏は其面を澤し、餅は人の心を養ふ。主の樹、其植えたるリワンの柏香木はあき足れり、鳥は其上に巢を造る、松は鶴の棲處たり、高き山は鹿の爲、磐石は兔の爲に避所たり。主は月を造りて時を定め、日は其入る處を知る。爾暗を布けば、則夜あり、其時林の獸皆出て廻る、獅は獲物の爲に吼えて、其食を神に乞ふ。日出づれば、彼等集りて己の穴に伏す。人は其工作の爲に出て、勞きて暮に至る。主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、地は爾の造物にて満ちたり。夫の大にして廣き海、彼處には無数の動物、大小の生物あり、彼處には舟通ひ、彼處には彼の大魚あり、爾造りて其中に遊ばしむ。彼等は皆爾が時に随ひて食を予ふるを待つ。之に予ふれば受け、爾の手を開けば賜にあかせらる、爾の顔を隠せば惶れ惑ひ、其氣を取り上ぐれば死して塵に歸る、爾の氣を施せば造られ、爾は又地の面を新にす。願くは光榮は世世に主に在らん、願くは主は己の造工の爲に樂まん。彼地を觀れば、地震ひ、山に触るれば、煙起つ。我生ける中主に歌ひ、世終るまで我が神に歌はん。願くは我が歌は彼に悦ばれん、我主の爲に樂まん。願くは罪人等は地より消え、不法の者は存するなけん。我が^{たましい}靈よ、主を讃め揚げよ。

誦経 光榮は父と子と聖神^{いつ}に歸す、今も何時も世世に、「アミン」

ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya、神よ、光榮は爾に歸す。(三次)

[大連禱] (普通のメロディで)

輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主憐めよ
輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい} 靈^{すくい}の救の爲に主に禱らん、
輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、
輔祭 此の聖堂、及び信と^{つつしみ} 慎と神を畏るる心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、
輔祭 教會を司る我等の(府)主教()、司祭の尊品、ハリストスに^よ因る
輔祭職、^{ことごと} 悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、
輔祭 我が國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、
輔祭 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、
輔祭 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、
輔祭 航海する者、旅行する者、病を患ふる者、^{かんなん} 艱難に遭ふ者、^{とりこ} 虜となりし者、及び彼
等の^{すくい} 救の爲に主に禱らん、
輔祭 我等^{もろもろ} 諸の^{うれい} 憂愁と^{いかり} 忿怒と^{あやうき} 危難とを免るるが爲に主に禱らん、
輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を^{たす} 助け救ひ憐み護れよ、
輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸
聖人とを記憶して、我等己の身及び互に^{おのおの} 各の身を以て、^{ならび} 並に^{ことごと} 悉くの我等の^{いのち} 生命
を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主爾に

司祭 ^{けだし} 蓋凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神^〇に歸す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

(詠) [主よ汝に籲ぶのスティヒラ] 第140聖詠(その週の調で歌う)

主よ、爾に籲ぶ、^{すみやか} 速に我に^{いた} 格子給へ。主よ、我に^{すみやか} 聴き給へ。主よ、爾に籲ぶ、^{すみやか} 速
に我に^{いた} 格子給へ。爾に^よ ぶ時我が^{こゑ} 禱の聲を^{いれ} 納れ給へ。主よ、我に^{すみやか} 聴き給へ。
願くは我が^{かみ} 禱は^{かみ} 香爐の^{かみ} 香の如く爾が^{かんばせ} 顔の前に^{あが} 登り、我が^て 手を^あ 擧ぐるは^く 暮の^{まつ} 祭の如
く^い 納れられん。主よ、我に^{すみやか} 聴き給へ。

誦經 主よ、我が口に衛^{まわり}を置き、我が唇の門^{ふせ}を扞ぎ給へ、我が心に邪^{よこしま}なる言^{ことば}に傾きて、不法を行ふ人と共に罪の誑^{いわけ}せしむる母^{なか}れ、願くは我は彼らの甘味を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜恤^こなり、我を譴^{きようじゆつ}むべし、是れ極と美しき膏^{あぶら}、我が首^こを悩ます能はざる者なり、唯^{ただ}我が祷は彼等の惡事に敵す。彼等の首長は巖石の間に散じ、我が言^{ことば}の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り碎き、我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯^{ただ}我が目は爾を仰ぎ、我爾^{たの}を待む、我が靈^{たましい}を退くる母^{なか}れ。我が爲に設けられしわな、不法者の羅^{あみ}より我を護り給へ。不虔者は己の網^{かか}に羅^{ただ}り、唯^{ただ}我は過ぐるを得ん。

第141聖詠

我が聲を以て主に^よび、我が聲を以て主に^よび、我が^{その}祷を其前に^{その}注ぎ、我が^{その}憂を其前に^{その}顯せり。我が^{うち}靈我の衷に^{うち}弱りし時、爾は^{みち}我の途を知れり、我が行く路に於て^{ひそか}彼らは竊に^{ひそか}我が爲に^{ひそか}網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に^の遁るる所なく、人の我が^{かえりみ}靈を顧る者なし。主や我爾に^よんで云へり、爾は^{かくれが}我の避所なり、生ける者の地に於て^{ぶん}我の分なり。我が^{はなはだ}よぶを聴き給へ。我^{はなはだ}甚弱りたればなり、我を迫害する者より救ひ給へ、彼等は我より強ければなり。

八調経から痛悔のステイヒラ (その週の調で)

【第1調】

(句) 我が^{ひとや}靈を獄より引出して、我に^{ひとや}爾の名を讚榮せしめ給へ、
救世主よ、我が^{きゆうせいしゆ}罪の淵は深し、我^{われ}罪惡の爲に^{ため}甚しく沈めらるるに^よ因りて、ペトル^おに於けるが^{ごと}如く、神よ、我に^{かみ}手を授けて、我を^{われ}救ひ、我を^{われ}憐み給へ。

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。
神救世主よ、我^{われ}惡しき思^{おも}と行^{おこな}いとに於て^お定罪せられしに^よ因りて、我に^{われ}反正の意^{はんぜい}念^{いねん}を與へて、爾に^お呼ばしめ給へ、仁慈なる恩主よ、我を^{われ}救ひ、我を^{われ}憐み給へ。

(句) 主よ、我^{たましい}深き處より^た爾によぶ。主よ、我が^{せかい}聲を聴き給へ。
靈よ、他の世界は^{なんじ}爾を待つ、審判者は^ま爾の隱なる事と^{しんぱんしゃ}甚しき諸罪とを^{なんじ}顯さん、故に^{ひそか}此等に^{こと}耽る勿れ、速^{はなはだ}に^{しよざい}審判者に向ひて^{あらわ}呼べ、神よ、我を^{しよざい}潔め、我を^{あらわ}救ひ給へ。

(句) 願くは^い爾の耳は我が^い祷の聲を聴き納れん。
我が^わ救世主よ、罪惡の怠惰にて^{きゆうせいしゆ}縛られたる我を^な棄つる勿れ。我が^な思を痛悔の爲^なに^わ起し、我を^わ爾の^{おも}葡萄園の^{おも}善き^{おも}工人と^{おも}顯し、我に^{おも}第十一時の^{おも}報と^{おも}大なる^{おも}憐とを與へ給へ。

【第2調】

(句) 我が^{ひとや}靈を獄より引出して、我に^{ひとや}爾の名を讚榮せしめ給へ、
ハリストス^{きゆうせいしゆ}救世主よ我放蕩の子の如く^こ爾の^{ごと}前に^{なんじ}罪を獲たり、父よ我痛悔する者^なを^な納れよ、神よ、我を^な憐み給へ。

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

ハリストス救世主よ、我税吏の聲を以て爾に呼ぶ、神よ、我を彼の如く潔めて、
我を憐み給へ。

(句) 主よ、我深き處より爾によぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

仁慈の主よ、我は行ひし不當なる我が行爲を思ひて、税吏と、泣きたる淫婦と、
放蕩の子に效ひて、爾の慈憐に趨り付き、爾に俯伏して祈る、神よ、我を定罪
せざる先に我を宥めて、憐み給へ。

(句) 願くは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

童貞女より生れし主よ、我が不法を顧みずして、我が心を潔めて、之を爾の
聖神の殿と爲し給へ。無量なる大仁慈を有つ主よ、我を爾の顔より退くる勿
れ。

【第3調】

(句) 我が靈を獄より引出して、我に爾の名を讃榮せしめ給へ、

ハリストスよ、我等は暮の歌を香爐及び屬神の詩賦と共に爾に奉る、我等の
靈を憐みて救ひ給へ。

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

主我が神よ、我を救ひ給へ、爾は衆人の爲に救なればなり。諸愆の烈風は我を
擾し、我が不法の重負は我を溺らす。我に援助の手を授けて、我を痛悔の光に
升せ給へ、爾獨慈憐にして人を愛する主なればなり。

(句) 主よ、我深き處より爾によぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

主よ我が散らされたる思を聚め、我が荒れたる心を潔め給へ。ペトルに於ける
が如く我に痛悔を、税吏に於けるが如く歎息を、淫婦に於けるが如く涙を與へ
給へ、我が大なる聲を以て爾に呼ばん爲なり、神よ、我を救ひ給へ、爾獨仁慈
にして人を愛する主なればなり。

(句) 願くは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

我屢歌頌を獻じて、罪を犯すと顯れたり、蓋舌にて歌頌を唱へ、靈にて不當
の事を思ふ。ハリストス神よ、痛悔を以て爾ながら之を改めて、我を救ひ給へ。

【第4調】

(句) 我が靈を獄より引出して、我に爾の名を讃榮せしめ給へ、

主よ、我涙を以て吾が罪の書券を滌ひ、吾が生命の餘日の痛悔を以て爾を悦ば
しめんと愆したれども、敵は我を誘ひて、吾が靈を攻む、主よ、我が未だ全
く亡びざる先に我を救ひ給へ。

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

主よ、誰か颶風に遭ひて、爾の停泊に着きて救を獲ざらん、或は誰か病に遇
ひて、爾萬有の造成主及び病む者の醫師の治療を求めて愈ゆるを得ざらん、主

よ、我が未だ全く亡びざる先に我を救ひ給へ。

(句) 主よ、我深き處より爾によぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

救世主よ、我が涙にて我を滌ひ給へ、我多くの罪に由りて汚されたればなり。
故に爾の前に俯伏す、神よ、我罪を犯せり、我を憐み給へ。

(句) 願くは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

我は爾の靈智なる群の羊にして、爾善き牧者に趨り附く。神よ、我迷ひし者を
尋ね獲て、我を憐み給へ。

【第5調】

(句) 我が靈を獄より引出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ、

主よ、我罪を犯して息めず、仁愛を蒙りて覺らず、獨仁慈なる主よ、我が心の
頑陋なるに勝ちて、我を憐み給へ。

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

主よ、我爾の威嚴を畏るれども、悪を行ふを息めず、誰か審判に遇ひて審判者
を恐れざる、或は誰か醫されんと欲して醫師を怒らすること我の如くなる。
恒忍の主よ、我が劣弱に慈憐を垂れて、我を憐み給へ。

(句) 主よ、我深き處より爾によぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

童貞女より生れし主よ、祈る、我が多くの罪過を顧みずして、我に痛悔の心を
與へて、我が悉くの罪を潔めて我を憐み給へ、爾獨人を愛する主なればなり。

(句) 願くは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

禍なる哉、我孰にか似たる者と爲りし、果なき無花果樹の如くなりて、詛と斫
られることとを畏る。祈る、天の耕作者ハリストス神よ、我が荒れたる靈を果
を結ぶ者と爲し、我を蕩子の如く受けて、我を憐み給へ。

【第6調】

(句) 我が靈を獄より引出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ、

ハリストスよ、願くは我等は爾の畏るべき降臨の時に、我爾等を識らずと言
ふを聞かざらん。救世主よ、我等は怠惰に因りて爾の命を守らざりきと雖、
侍頼を爾に負はせたり。祈る、我等の靈を宥め給へ。

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

ハリストス神よ、我痛悔をも涙をも得ざりき、故に爾に祈る、終の至らざる先
に我を轉ぜしめて、我に傷感を與へ給へ、我が苦より脱れん爲なり。

(句) 主よ、我深き處より爾によぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

敵は我を徳行に裸體なる者と見て、罪の矢にて傷つれたり。神よ、靈體の醫師と
して、吾が靈の傷を醫して、我を憐み給へ。

(句) 願くは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

おお つみ よ わ ころ きず ますますくわ きゅうせいしゅ れいたい いし これ いや
多くの罪に由りて吾が心の傷は益加はる、救世主よ、靈體の醫師として之を醫
し給へ。求むる者に諸罪の赦を與ふる主よ、常に我に痛悔の涙と罪債の赦と
を與へて、我を憐み給へ。

【第7調】

(句) 我が靈を獄より引出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ、
じんじ かみ われ とうし ごと きた ひと あい しゅ われ ふふく もの なんじ やといびと
仁慈なる神よ、我蕩子の如く來れり、人を愛する主よ、我俯伏する者を爾が傭人
の如く納れて、我を憐み給へ。

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。
ぬすびと あ もの きず ごと か われ おお つみ おちい わ たましいきず
盜賊に遇ひたる者の傷つけられし如く、斯く我も多くの罪に陥りて、吾が靈傷
つけられたり。我罪なる者は誰にか趨り附かん、唯爾慈憐なる靈の醫師に就き
て祈る、神よ、我に爾の大なる仁慈を沃ぎ給へ。

(句) 主よ、我深き處より爾によぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。
きゅうせいしゅ み むす いちじく ごと われ ざいにん き なか もと たねん これ ま
救世主よ、果を結ばざる無花果樹の如く、我罪人を研る勿れ、求む、多年之を待
ちて、吾が靈を痛悔の涙にて濕し給へ、我が爾に矜恤の果を捧げん爲なり。

(句) 願くは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。
ぎ ひ なんじ うた もの ころ てら たま しゅ こうえい なんじ き
義なる日として爾を歌ふ者の心を照し給へ、主よ、光榮は爾に歸す。

【第8調】

(句) 我が靈を獄より引出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ、
しよてんし た なんじおう およ しゅさい かしょう ただわれ なんじ まえ ふふく ぜいり ごと
諸天使は絶えず爾王及び主宰を歌頌す、惟我は爾の前に俯伏して、税吏の如く
呼ぶ、神よ、我を潔め、我を憐み給へ。

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。
ふし わ たましい どせい なみ おお なか すなわち た なんじ おんしゅ よ かみ
不死なる我が靈よ、度生の浪に覆はるる勿れ、乃起ちて爾の恩主に呼べ、神
よ、我を浄め、我を救ひ給へ。

(句) 主よ、我深き處より爾によぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。
われおこな あく おお おもい うち い またかれ おそ きつもん おも とき おその おの
我行ひたる悪の多きを思念の中に入れ、又彼の畏るべき詰問を懐ふ時、恐れ戰
きて爾仁愛なる神に趨り附きて祈る、獨罪なき主よ、我を遺つる母れ、終の先
に我が卑微なる靈に傷感を賜ひて、我を救ひ給へ。

(句) 願くは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。
かみ わかし つみ おんな お ごと われ なみだ あた ままい みち われ き
神よ、昔の罪ある婦に於けるが如く、我に涙を與へて、迷の途より我を去ら
しめたる爾の足を濡し、痛悔を以て潔めたる生命を香膏として爾に奉るを
得しめ給へ、我も爾の慕ふべき聲、爾の信は爾を救へり、安然として往けと云
ふを聞かん爲なり。

(以下三歌齋經のスティヒラ)

(句) 主よ、爾若し不法を糾さば、主よ孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、
人の爾の前に敬しまん爲なり。

ステヒラ、第二調。イオシフ師の作。(三歌齋經)

われらみなつとせつせいもつにくたいせい いぎぎよものいみ しんせい みち ゆ きとう
我等皆務めて節制を以て肉體を制し、潔き齋の神聖なる途を行きて、祈禱と
なみだもつ われら すく しゅ たず あく まった わす よ おう われら
涙とを以て我等を救ふ主を尋ね、悪を全く忘れて呼ばん、ハリストス王よ我等
なんじ まえ つみ おかか むかし じん ごと われら すく たま じれん しゅ
は爾の前に罪を犯せり、昔のニネウィヤ人の如く我等を救ひ給へ、慈憐の主よ、
われら てん くに あずか もの な たま
我等を天の國に與る者と爲し給へ。

(句) 我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

しゅ われ およそ くるしみ あた わ おこない おも のぞみ うしな けだし み われなんじ どうと
主よ、我は凡の苦に當る吾が行を思ひて望を失ふ、蓋視よ我爾の尊き
いましめ す ほうとう わ いのち ついや ゆえ いの きゅうせいしゅ つうかい なみだ われ
戒を棄てて、放蕩に我が生命を費せり。故に祈る、救世主よ痛悔の涙にて我
きよ ひとり じんじ しゅ ものいみ きとう われ てら たま しじん しゅ
を潔め、獨仁慈なる主として、齋と祈禱とを以て我を照し給へ、至仁なる
しゅうじん おんしゅ われ い なか
衆人の恩主よ我を忌む勿れ。

(句) 我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

又、フェオドル師の作。同調。

われら よろこ ものいみ とき ほじ ぞくしん きんろう おのれ ゆだ たましい きよ からだ
我等は欣ばしく齋の時を始め、屬神の勤勞に己を委ねて靈を淨め、體を
いぎぎよ しよく お ごと およそ よく ものいみ ぞくしん しよく たの みな
潔くし、食に於けるが如く凡の慾を齋して、屬神の諸徳を楽しまん、皆
ねつせつ これ すす かみ しぞん くるしみおよ せい しん もつ
熱切に之に進みて、ハリストス神の至尊なる苦及び聖なる「パスハ」を神を以て
よろこ み え たため
て喜びて見るを得ん爲なり。

(句) 願はイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、
そのことごとく
彼はイズライリを其悉の不法より贖はんとす。

月課經からステヒラ (月課經はないので、以下省略)

(句) 萬民や主を讃め揚げよ、萬族や彼を崇め讃めよ。

月課經からステヒラ

(句) 蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

月課經からステヒラ

(詠) [生神女讚詞]

(月課經からその日の生神女讚詞を歌う。ない場合は八調經からその週の調の主日晩課生神女讚詞で代用、楽譜は別冊平日「主や爾によぶ」生神女讚詞参照)

【第1調】 光榮、今も、

むてん およそ ちえ こ かみ はは な しじょう もの なんじ いた
無玷なるマリヤ、凡の智慧に超えて神の母と爲りし至淨なる者よ、爾の至りて
のうりよく てんたつ もつ われ おお つみ かこ せば もの つうかい ひろ むか
能力ある轉達を以て、我多くの罪に圍まれて狭めらるる者を痛悔の廣きに向は
たま なんじ よく ところ しゅ はは これ よく
しめ給へ、爾は能せざる所なき主の母として、之を能すればなり。

【第2調】 光榮、今も、

しじょう もの なんじ こ むすう てんし さんせい こえ もつ なんじ かけ ひ きま ほうざ
至淨なる者よ、爾の子の無数の天使は、三聖の聲を以て、爾を彼の火の状の寶座、
い みや つね ち かけ わた しんせい ほし うた てんししゅ どうしん
活ける宮、常に地より彼に渡す神聖なる橋と歌ひて、天使首ガウリイルと同心に、
なんじよろこび いずみ もの よ おんちやう こうむ もの よろこ
爾歡喜の泉を生みし者に呼ぶ、恩寵を蒙れる者、慶べよ。

【第3調】 光榮、今も、

ばんぶつ さいせい しじょう もの われたまし しよよく ほげ せい もの なんじ ねっしん
萬物を宰制する至淨なる者よ、我靈の諸慾に厲しく制せらるる者を爾の熱心
なる轉達及び母の祈禱を以て釋きて、爾の子及び神に服役せしめ給へ。

【第4調】 光榮、今も、

てんし ひんい こ じゅんけつ もの てんし とも つね てんし およ ばんぶつ つかさど しゅ
天使の品位に超ゆる純潔なる者よ、天使と偕に常に天使及び萬物を宰する主に
祈りて、我等に諸罪の赦を賜ひ、我等を諸慾より脱れしめ、我等を其時に彼の
光榮を歌ひ及び永福を嗣ぐに勝ふる者と爲さんことを求め給へ。

【第5調】 光榮、今も、

いさぎよ もの なんじ じつ ほうざ しょてんし こ もの けだしかみ
潔き者よ、爾は實にヘルウィムの寶座にして、諸天使に超ゆる者なり、蓋神
の言は我等の形を新にせんと欲して、爾の内に入りたり、身を取りて爾より
出でて、仁慈なるに由りて我等の爲に十字架及び苦を受け、神なるに由りて
復活を賜へり。故に我等爾が我等の定罪せられし性を造物主と和睦せしめしを
感謝して、爾に呼ぶ、爾の祈禱に由りて我等に諸罪の赦と憐とを與へ給へ。

【第6調】 光榮、今も、

しょうしんじょ なんじ てんししゅ こえ よ ちちおよ せいしん どう わげん ことば たいない ほうら
生神女よ、爾は天使首の聲に因りて父及び聖神と同無原なる言を胎内に孕み
て、ヘルウィム、セラフム及び寶座より上なる者と現れたり。

【第7調】 光榮、今も、

われら みなてん しら とも うた もつ しょうしんじょ よ けだしかれ せかい ため きゆうしゅ う
我等皆天使等と偕に歌を以て生神女に呼ばん、蓋彼は世界の爲に救主を生み、
産の後に復童貞女に止まり、其産を以て世界を迷惘より救ひ、乳にて吾が靈の
贖罪主を養ひて、我等に竭きざる糧を與へ給へり。

【第8調】 光榮、今も、

われ ぞうぶつ つね ぞうぶつ しゅ うれ いか しょうじょ われ かいがい あた われ あらた
我造物は常に造物主を憂ひしめて怒らず、少女よ、我に悔改を與へて我を改め、
爾の助を以て神を悦ばしむる行に導き給へ、我が赦罪と救とを得ん爲なり。

誦經 聖にして福たる常生なる、天の父の聖なる光榮の^{おだやか}穩なる光イイスス・
ハリストスよ、我等日の入に至り、^{くれ}暁の光を見て、^{かみちち}神父と子と聖神^をを
歌ふ。生命を賜ふ神の子よ、爾は何時も敬虔の聲にて歌はるべし、故に
世界は爾を崇め讃む。

聖にして 福た-る
 常生なる 天の父の 聖なる 光栄の
 穏やかなる ひかり イイスス ハリストース や、
 われら 日の入りに いたり 晩の ひかりを 見て、
 神 父と子と 聖神を うた-う
 い-のちを 賜う 神の子 や、
 なんじは いつも 敬虔の 声にて 歌わる べし
 ゆえ 世界は 爾を 崇め 讃む

司祭 謹みて聴くべし。

[大ポロキメン]

誦經 ポロキメン

爾の 顔^{かんぼせ}を爾の僕に匿^{かく}す勿^{なか}れ、我哀しめばなり、速やかに我に聴き給へ、我が 靈^{たましい}に近づきて、之を援^{たす}けよ。

(詠) 爾の 顔^{かんぼせ}を爾の僕に匿^{かく}す勿^{なか}れ、我哀しめばなり、速やかに我に聴き給へ、我が 靈^{たましい}に近づきて、之を援^{たす}けよ。

誦經 (第1句) 神よ、願くは爾の助けは我を起こさん。

(詠) 爾の 顔^{かんぼせ}を爾の僕に匿^{かく}す勿^{なか}れ、……

誦經 (第2句) 苦しむ者は之を見て悦ばん。

(詠) 爾の^{かんばせ}顔^を爾の僕に^{かく}匿^{なか}す勿^れ、……

誦經 (第3句) 神を尋ぬる者よ、爾等の心は活きん。

(詠) 爾の^{かんばせ}顔^を爾の僕に^{かく}匿^{なか}す勿^れ、……

誦經 爾の^{かんばせ}顔^を爾の僕に^{かく}匿^{なか}す勿^れ、我哀しめばなり、速やかに我に聴き給へ、

(詠) 我が^{たましい}霊^に近づきて、之を^{たす}援^けよ。

なんじの かんばせを な—んじの ぼ—くに
か—くす な—かれ、 われかなしめば な—り
すみやかに われに 聴きたま—え
5回目
わが たましいに ちかづきて、こ—れを たすけよ
4回繰り返す

誦經 主よ、我等を守り、罪なくして此の日を^{わた}度^らせ給へ。主吾が先祖の神よ、爾は崇め^ほ讃^められ、爾の名は尊み歌はる、「アミン」

主よ、爾を^{たの}憐^むに^よ囚^りて、爾の憐を我等に垂れ給へ。主よ、爾は崇め^ほ讃^めらる、爾の^{いましめ}誠^を我に^{おし}訓^へ給へ。主宰よ、爾は崇め^ほ讃^めらる、爾の^{いましめ}誠^{にて}我に^{いましめ}悟^らせ給へ。

聖なる者よ、爾は崇め^ほ讃^めらる、爾の^{いましめ}誠^{にて}我を^{いましめ}照^らし給へ。
主よ、爾の憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿^れ。^{ほまれ}讃^は爾に^{ほまれ}歸^し、歌^は爾に^{ほまれ}歸^し、光榮は爾父と子と聖神^に歸^す、今も何時も世世に、「アミン」

[増連禱] ものいみのメロディで

大斎 増連禱

主 あわれめよ 主 たまえよ 主—な—んじに
アミン なんじの神^ににも 主—な—んじに アミン

輔祭 我等主の前に吾が晩の^{くれ いのり} 禱^をを増し加へん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 神よ、爾の恩寵を以て我等を^{たす} 助け救ひ憐み護れよ、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、 (詠) 主賜へよ
 輔祭 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜はんことを主に求む、
 輔祭 我等の罪と^{あやまち} 過^{なだ} とを宥め赦さんことを主に求む、
 輔祭 我等の^{たましい} 靈^に 善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む、
 輔祭 我等の^{いのち} 生命の余日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、
 輔祭 我等の^{いのち} 生命の終^{おわり} が「ハリストス」に^{かな} 適^{やまい} ひ、疾なく、恥なく、平安なること、及びハリストスの畏る可き^べ 審判^{おい} に於て宜しき^{こたへ} 對^ををなすを賜はんことを求む、
 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、
 諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に^{おのおの} 各^の 身を以て、並に^{ならび} 悉^{ことごと} くの我等の^{いのち} 生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主爾に
 司祭 ^{けだし} 蓋^を 爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神^に 獻ず、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」
 司祭 衆人に平安、 (詠) 爾の神^に にも
 輔祭 我等の^{こうべ} 首^{かが} を主に屈めん、 (詠) 主爾に
 司祭 願くは爾父と子と聖神^に の國の權柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

誦經 【挿句のスティヒラ】『三歌齋經』参照 第四調。

主よ、爾の恩寵は輝き、我等の靈の光照は輝けり。視よ、嘉く納るべき時、
 視よ、痛悔の時なり、我等は昏昧の行を除きて、光明の甲を衣ん、齋の大なる海を濟りて、我が救世主イイススハリストス、我等の靈を救ふ主の三日目の復活に至らん爲なり。

(句) 天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

同上の讚頌

主よ、爾の恩寵は輝き、我等の靈の光照は輝けり。視よ、嘉く納るべき時、
 視よ、痛悔の時なり、我等は昏昧の行を除きて、光明の甲を衣ん、齋の大なる海を濟りて、我が救世主イイススハリストス、我等の靈を救ふ主の三日目の復活に至らん爲なり。

(句) 主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は毎に賢き足れり。我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに賢き足れり。

致命者讚詞

爾の諸聖人の記憶に於て榮せらるるハリストス神よ、彼等の祈禱を納れて、我等に大なる憐を垂れ給へ。

光榮、若し之あらば、月課經の自調のスティヒラ、今も、生神女讃詞、月課經の調に依る。若し之なくば、

光榮、今も、

生神女讃詞、同調。

純潔なる神の母よ、天の品位は爾を讃榮す、蓋爾は父及び聖神と同永在にして、己の旨を以て天軍を無より造りし神を生み給へり。至りて無玷なる者よ、爾を歌頌する正教者の靈を壊滅より救ひて照さんことを彼に祈り給へ。

誦經 主宰よ、今爾の言に循ひて、爾の僕を釋し、安然として逝かしむ。蓋我が目は爾の救を見たり、爾が萬民の前に備へし者なり、是れ異邦人を照らす光、及び爾の民イズライリの榮なり。

誦經 【聖三祝文】[至聖三者][天主經]

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光榮は父と子と聖神[°]に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。(三次)

光榮は父と子と聖神[°]に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願くは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神[°]に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」

(詠) [生神女讃詞] (四調)

生神・童貞女よ、慶べよ、恩寵に満たさるるマリヤよ、主は爾と偕にす、爾は女の中にて讚美たり、爾の胎の臬も讚美たり、爾は我等の靈を救ふ主を生みたればなり。(叩拜一次)
光榮は父と子と聖神[°]に歸す。

ハリストスの授洗者よ、我等衆人を記憶して、我が不法より救はるるを得しめ給へ、我等の爲に祈禱する恩寵は爾に賜はりたればなり。(叩拜一次)

今も何時も世世に「アミン」。

聖使徒と諸聖人よ、我等の爲に祈りて、我等に禍と憂より救はるるを得しめ給へ、爾等は救世主の前に吾が熱心の中保者なればなり。(叩拜一次)

生神女よ、我等爾が慈憐の下に趨り附く、危き時に於て我等の祈禱を斥くる勿れ、獨淨く、獨崇め讚めらるる者よ、我等を諸の禍より救ひ給へ。

生神童貞女や、慶こべよ 恩寵に満たさるる マリアよ
主は爾とともにす、なんじは女のうちに讚美たり
爾の腹の果も讚美たり、なんじは我等の霊を救う主を
生みたればなり。 光榮は父と子と聖神に歸す
ハリストスの授洗者や、我等衆人を記おくして
我が不法より救わるるを得しめたまえ、われらの為に
祈祷する恩寵はなんじに賜りたればなり。 **叩拝1次**
いまも何時も世世にアミン。 聖使徒と諸聖人よ、
われらの為にいのりて、我等に、禍と ^{わざわい} 憂い ^{うれ} より

救わるるを得しめたまえ なんじらは救世主の前に
 我が熱心の中保者なればなり。生神女や、我等爾が
 慈憐のもとに趨りつく、危うき時において 我等の祈禱を退くる
 なかれひとり 浄くひとり 崇め 讃めらるものよ
 我等を諸々の禍より救いたまへ。

誦經 主憐めよ。(三次)

光榮は父と子と聖神^{いっ}に歸す、今も何時も世世に、「アミン」
 ヘルワィムより尊く、セラフィムに並^{ならび}なく榮え、貞操^{みさお}を壞^{やぶ}らずして神言^{かみことば}を生みし
 實の生神女たる爾を崇め讃む。
 神^ほ父よ主の名を以て祝讃せよ。

司祭 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、
 誦經 「アミン」

誦經 天の王よ、我等の國を佑^{たす}け、正教を固め、異教を順^{したが}はせ、世界を穩^{おだやか}にし、克^よく
 此の聖堂を護り、已に過ぎ去りし我等の諸父兄弟^{けいてい}を義人の住居^{すまい}に置き、並^{ならび}に我等
 の痛悔^{うげとめ}と承認^いとを納れ給へ、爾は仁慈にして人を愛する主なればなり。

司祭 **【エフレムの祝文】**

主吾^{いのち}が生命の主宰^{おこたり}よ、怠惰^{もだえ}と、愁悶^{しのぎ}と、陵駕^{むだごと}と、空談^{こころ}の情^{あた}を我に與ふる勿れ。

(伏拜一次)

貞潔^{みさお}と、謙遜^{へりくだり}と、忍耐^{こらえ}と、愛^{こころ}の情^{こころ}を我爾の僕に與へ給へ。(伏拜一次)

嗚呼^{ああ}主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟^{けいてい}を議せざるを賜へ、蓋^{けだし}爾は世世に崇め讃
 めらる、「アミン」。(伏拜一次)

(又躬拜すること六次、每次黙誦して曰く)

神よ、我罪人を浄め給へ。

主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に興ふる勿れ。

貞潔と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に興へ給へ。

嗚呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讃めらる、「アミン」。(伏拜一次)

司祭 ハリストス神我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

(詠) 光榮は父と子と聖神[°]に歸す、今も何時も世世に、「アミン」
主憐めよ。(三次) 福を降せ。

司祭 [發放詞]

ハリストス我等の眞の神は、其至浄なる母、()、光榮にして讚美たる聖使徒聖()、聖にして義なる神の祖父母イオアキムとアンナ及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり。

(詠) 「アミン」

[萬寿詞] 神よ、我が国の天皇、及び国を司る者、我等の主教()及び悉くの正教のハリストティアニン等を幾歳にも護り給へ。

